



花の

三日月

一陽新地
一陽新地

歌
其
由



三日月

三日月





真由 歌

一陽新世
一筆奪天

中

新
歌



其茶部の傍

二篇 上冊



京都指荷祭御迎提灯之図

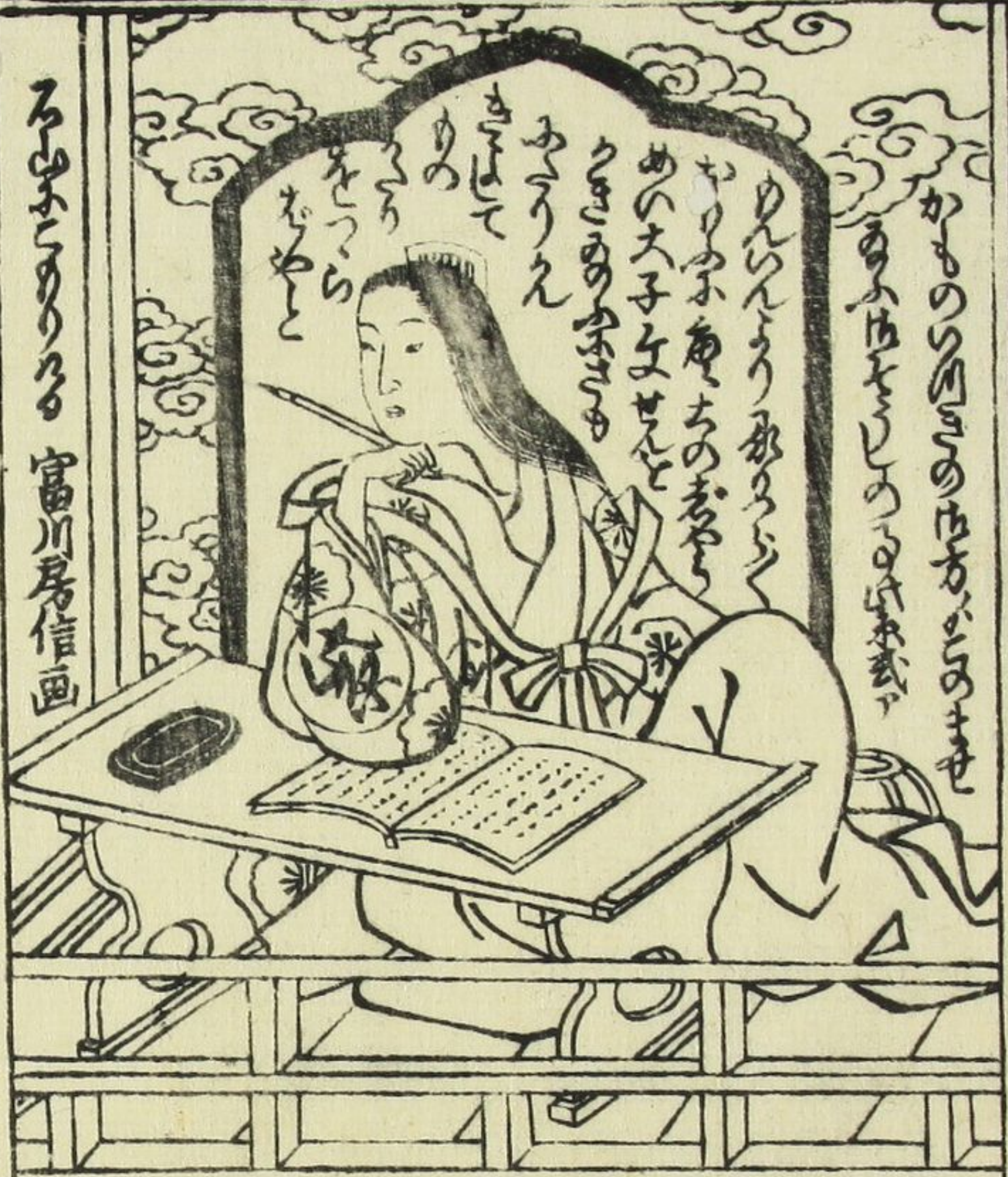
此序を書くと... 時一個の客あり... 直木柱の巻... 巻生... 武器小腹巻... 種前... 源... 何... 新... 青... を... 果...

書事 印本 今様 榮化 物語 又出 言画 字を撰

副の頃三

お丁は金糸を寒くもあまぬ
 維時弘化丁未歳初秋稿脱
 同戊申年新春發兌

一筆茶弁主人識



富川房信画

此巻ハ薫何と芳は香気
 誌を其因ふり
 花鳥餘情小薰物を埋ひ源と
 長し六梅花の梅の香気は新の
 元ふ埋と澄懐録香譜中載唐
 中も梅花の薰物何の香を御さる
 者諸香を合氣味梅花の如く
 一む是を辨と返魂梅と見え
 一り後柏茶の柏玉集小他の蓮と後
 水近くうめはまきとてこの中
 ひもこれの池のちちと香集類
 抄小何の香小擬と夏月殊ふ
 芳を鏡ももる梅花も入る
 きてとちちの香ふとて侍後
 と云ハ秋風涼くかきまわ



香の香は出する
 梅の花は黒が
 六種の香は
 ありと云は梅
 香の香は出する
 梅の花は黒が
 六種の香は
 ありと云は梅

香の香は出する
 梅の花は黒が
 六種の香は
 ありと云は梅

巻の名
耀元琵琶を弾く催馬樂の
梅ヶ枝を唱へん

わめくらんふこのあ
あやまきうけ
二段
三段
うやまき
うやまき
うやまき



薰物合の後
足利の室
此糸の上

此糸君ハ箏琴ヲ奏シ
千鳥の曲を奏する

むねがらんふこのあ
あやまきうけ
二段
三段
うやまき
うやまき
うやまき



足利
耀元卿

泣れあはれ
うたせは

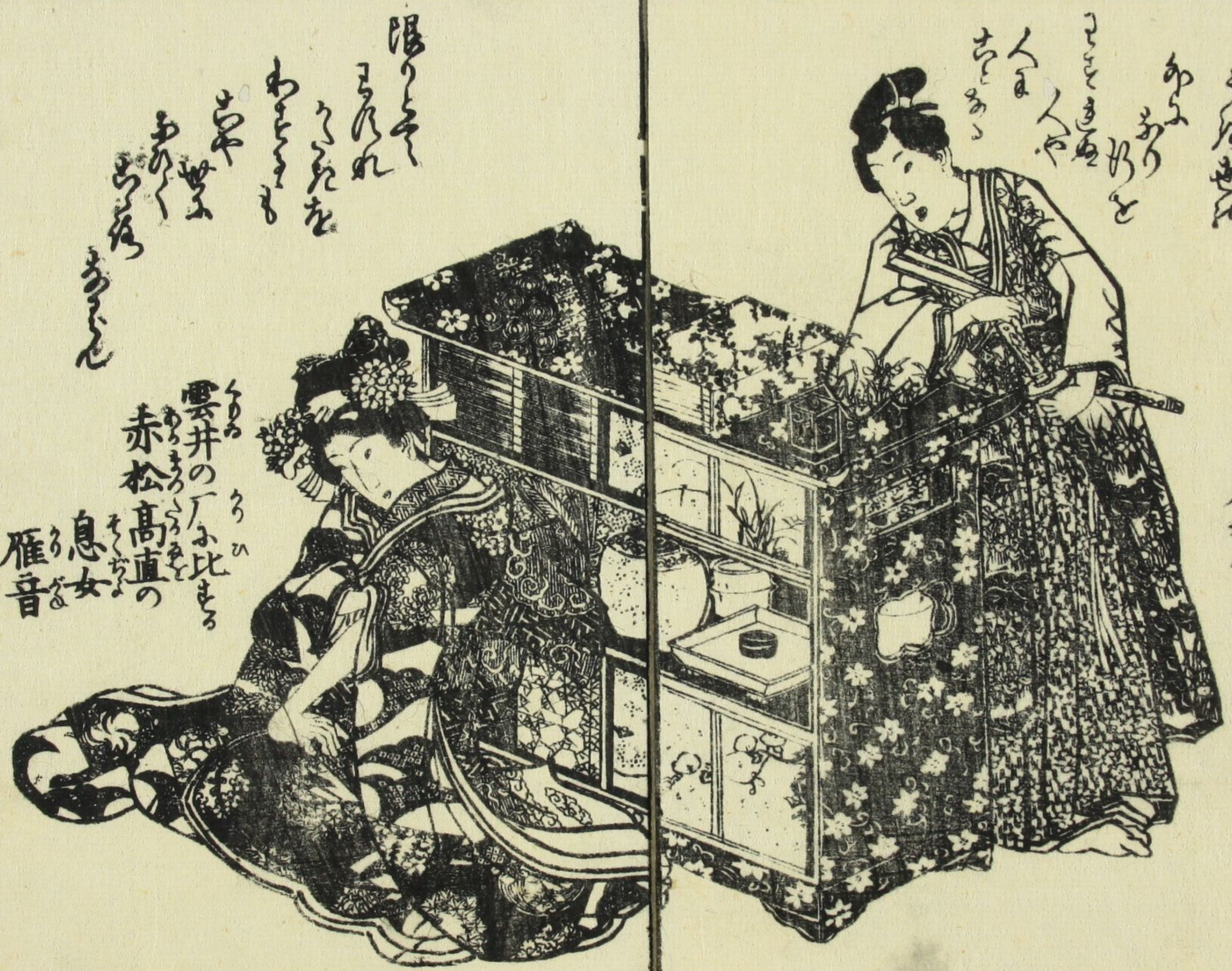
あふ
あり
と

くま
あはれ

夕霧の宰相の比まろ
足利雲井之丞氏仲

陽のそと
うたせは
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

雲井の厂ふ比まろ
赤松高直の
息女
雁音



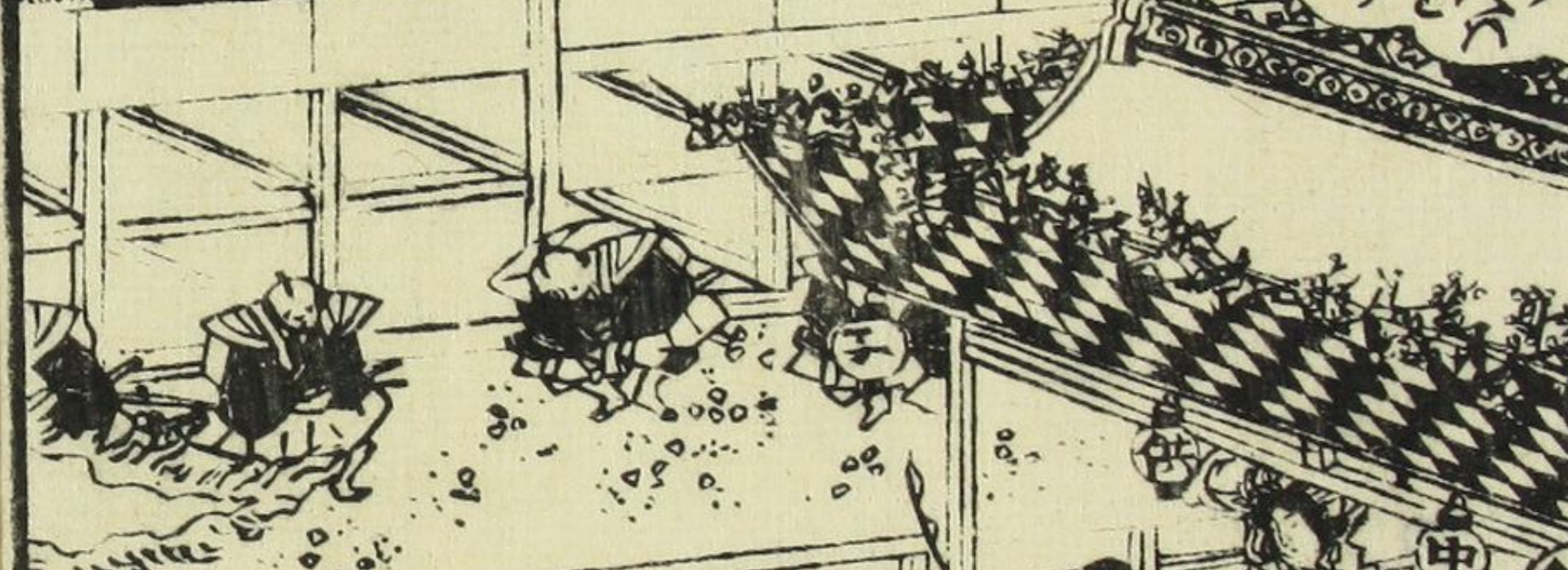
Handwritten text in a cursive script, likely Japanese, surrounding the illustration on the right page. The text is arranged in vertical columns, with some lines crossing the top and bottom borders of the image area.



Handwritten text in a cursive script, likely Japanese, surrounding the illustration on the left page. The text is arranged in vertical columns, with some lines crossing the top and bottom borders of the image area.



Handwritten text in the top section of the right page, likely a letter or report.



Handwritten text in the top section of the left page, likely a letter or report.



Handwritten text in the bottom section of the left page, likely a letter or report.

カノ國政画

Handwritten text in vertical columns, likely a narrative or commentary, surrounding the illustration of a seated figure.



Handwritten text in vertical columns, likely a narrative or commentary, surrounding the illustration of a seated figure at a table.



一、うらやまの心
 二、あはれみの心
 三、おぼろげな心
 四、あきらめの心
 五、あきらめぬ心
 六、あきらめぬ心
 七、あきらめぬ心
 八、あきらめぬ心
 九、あきらめぬ心
 十、あきらめぬ心
 十一、あきらめぬ心
 十二、あきらめぬ心
 十三、あきらめぬ心
 十四、あきらめぬ心
 十五、あきらめぬ心
 十六、あきらめぬ心
 十七、あきらめぬ心
 十八、あきらめぬ心
 十九、あきらめぬ心
 二十、あきらめぬ心



品物三

一、あきらめぬ心
 二、あきらめぬ心
 三、あきらめぬ心
 四、あきらめぬ心
 五、あきらめぬ心
 六、あきらめぬ心
 七、あきらめぬ心
 八、あきらめぬ心
 九、あきらめぬ心
 十、あきらめぬ心
 十一、あきらめぬ心
 十二、あきらめぬ心
 十三、あきらめぬ心
 十四、あきらめぬ心
 十五、あきらめぬ心
 十六、あきらめぬ心
 十七、あきらめぬ心
 十八、あきらめぬ心
 十九、あきらめぬ心
 二十、あきらめぬ心

一、あきらめぬ心
 二、あきらめぬ心
 三、あきらめぬ心
 四、あきらめぬ心
 五、あきらめぬ心
 六、あきらめぬ心
 七、あきらめぬ心
 八、あきらめぬ心
 九、あきらめぬ心
 十、あきらめぬ心
 十一、あきらめぬ心
 十二、あきらめぬ心
 十三、あきらめぬ心
 十四、あきらめぬ心
 十五、あきらめぬ心
 十六、あきらめぬ心
 十七、あきらめぬ心
 十八、あきらめぬ心
 十九、あきらめぬ心
 二十、あきらめぬ心



濱島室町の
 所を退す

一、あきらめぬ心
 二、あきらめぬ心
 三、あきらめぬ心
 四、あきらめぬ心
 五、あきらめぬ心
 六、あきらめぬ心
 七、あきらめぬ心
 八、あきらめぬ心
 九、あきらめぬ心
 十、あきらめぬ心
 十一、あきらめぬ心
 十二、あきらめぬ心
 十三、あきらめぬ心
 十四、あきらめぬ心
 十五、あきらめぬ心
 十六、あきらめぬ心
 十七、あきらめぬ心
 十八、あきらめぬ心
 十九、あきらめぬ心
 二十、あきらめぬ心

安政四丁巳新鐫目錄

在庄地本錦繪問屋東都下子惠比壽屋庄七版



笠亭仙果作
一陽齋豊國画
梅蝶樓國貞画

田中

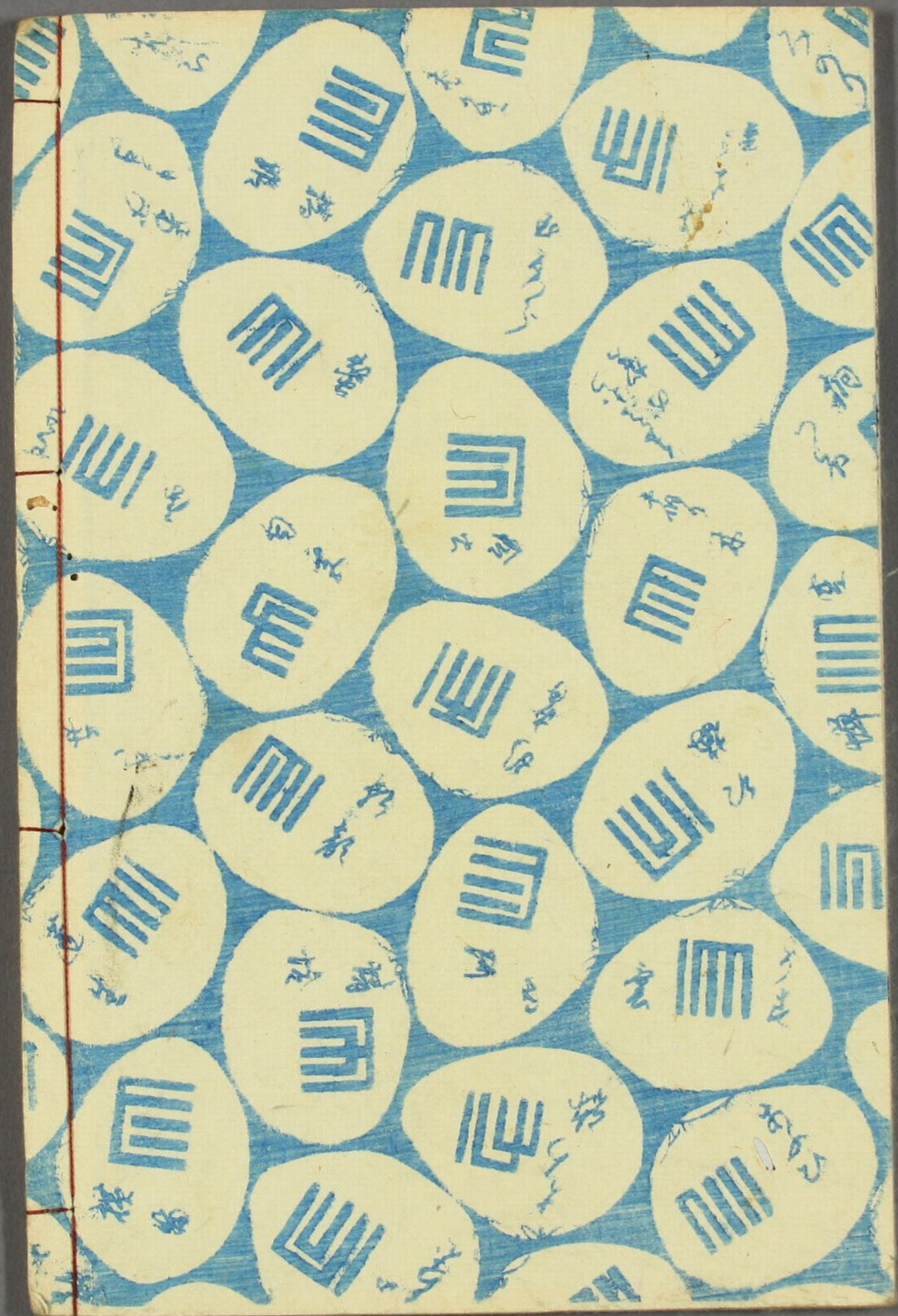


一陽齋豊國画 一筆茶主人戲作

Illustration of a tea ceremony scene with several women in traditional attire gathered around a table with a large bowl. The scene is surrounded by columns of vertical text in both Japanese and English, providing a detailed description of the event and the artist's intent.

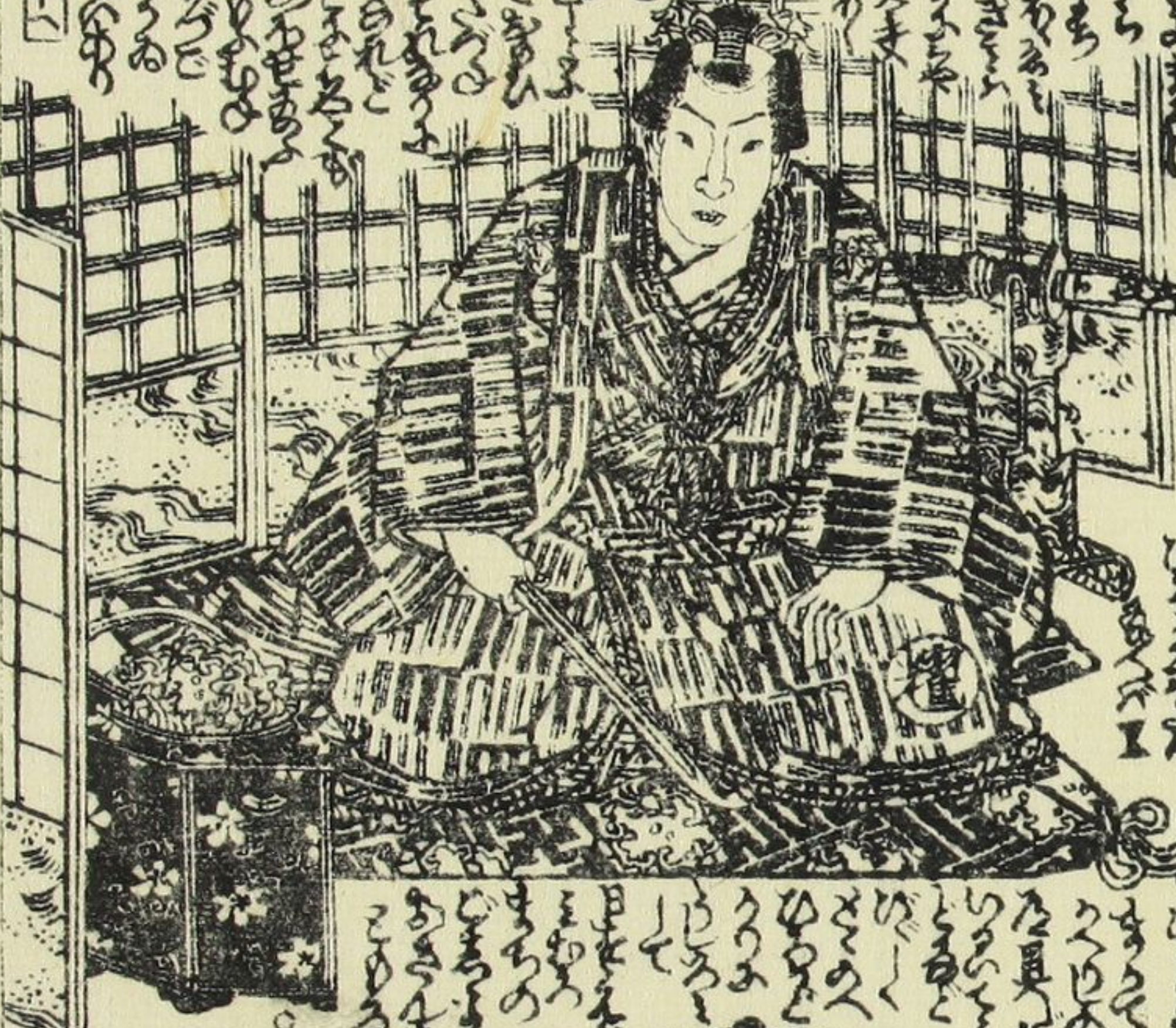
淨寫
隨風舍柳枝

迎風招慶

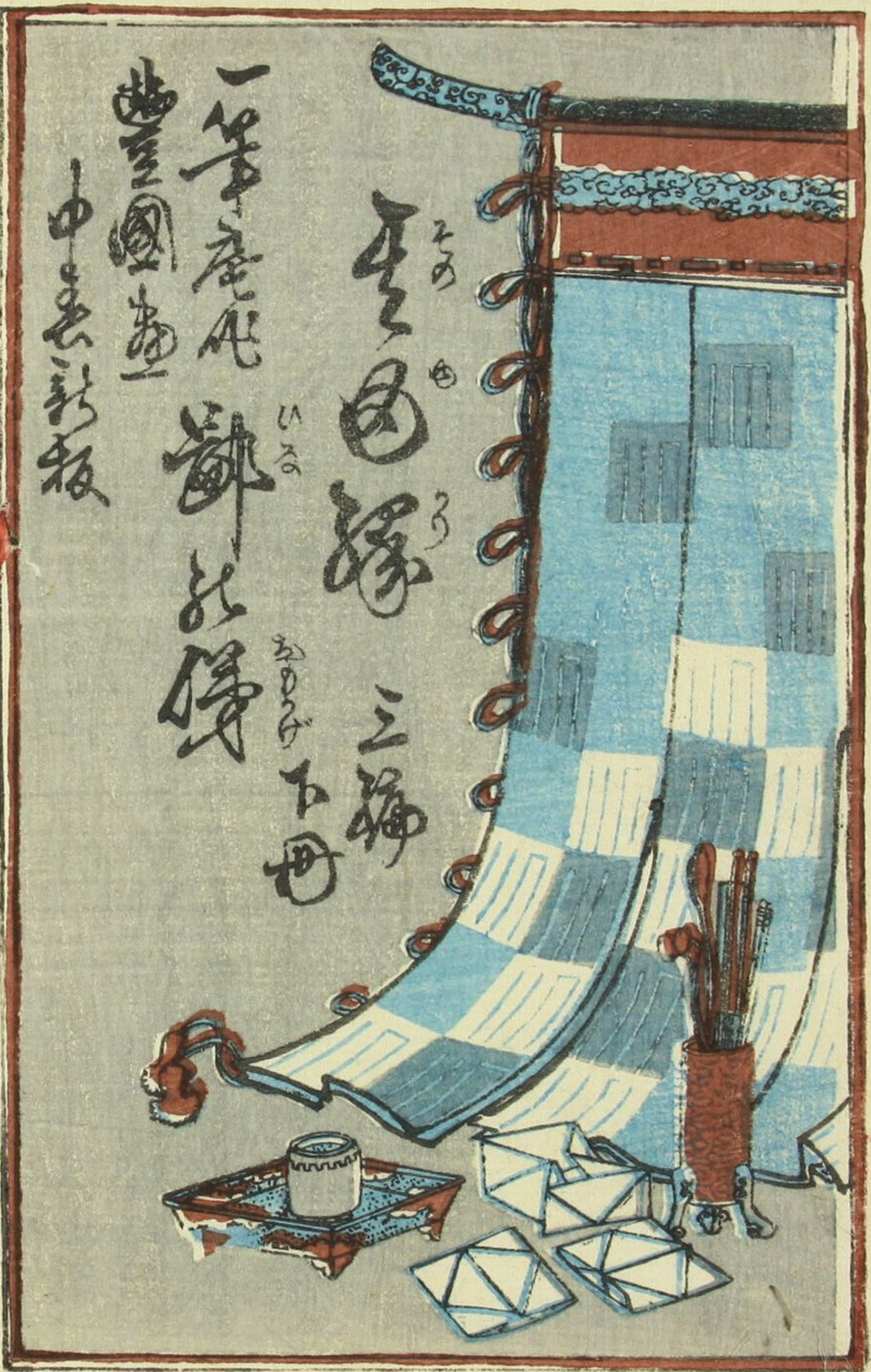
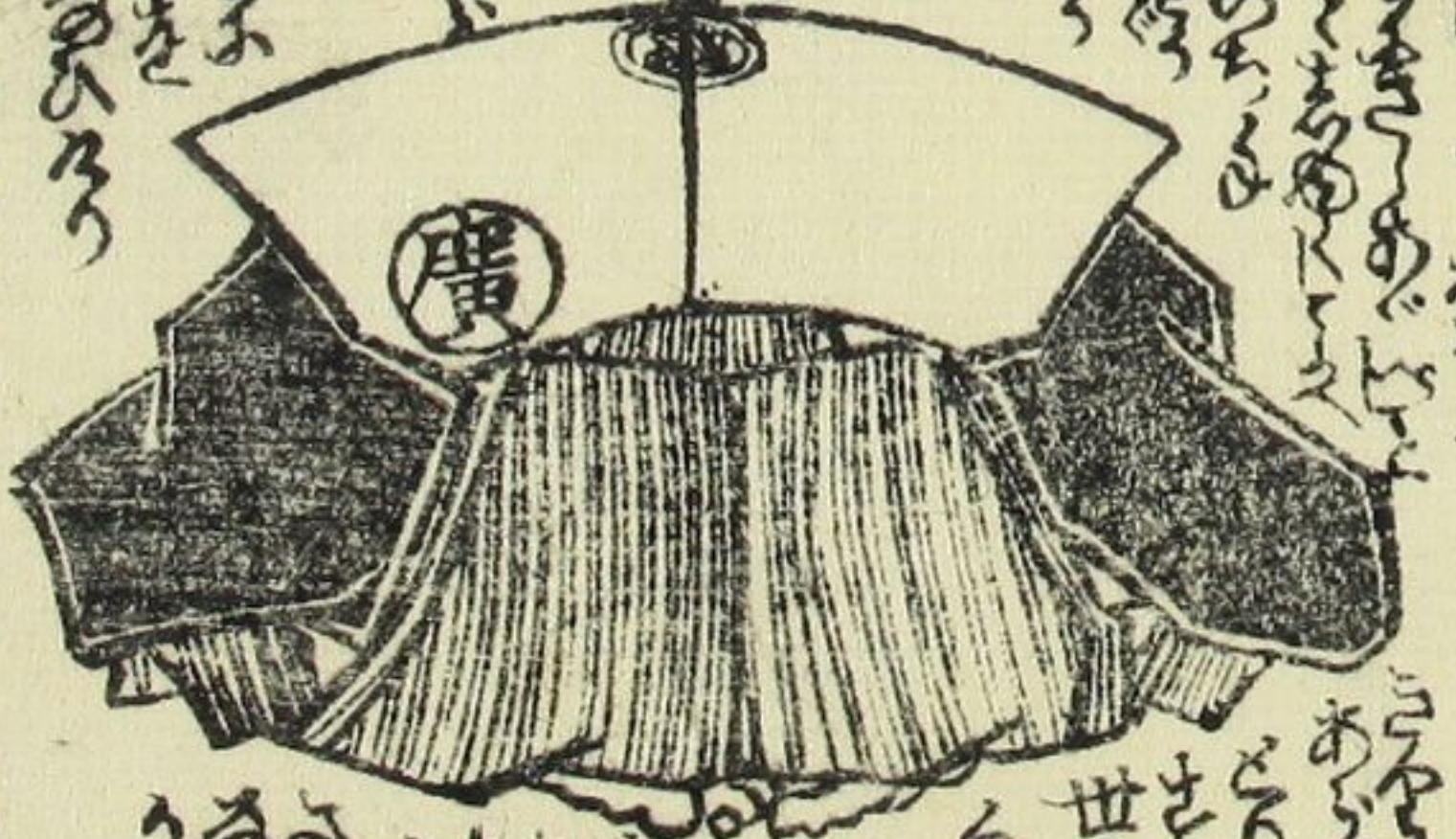




一、此の書は、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、
 二十一、
 二十二、
 二十三、
 二十四、
 二十五、
 二十六、
 二十七、
 二十八、
 二十九、
 三十、
 三十一、
 三十二、
 三十三、
 三十四、
 三十五、
 三十六、
 三十七、
 三十八、
 三十九、
 四十、
 四十一、
 四十二、
 四十三、
 四十四、
 四十五、
 四十六、
 四十七、
 四十八、
 四十九、
 五十、

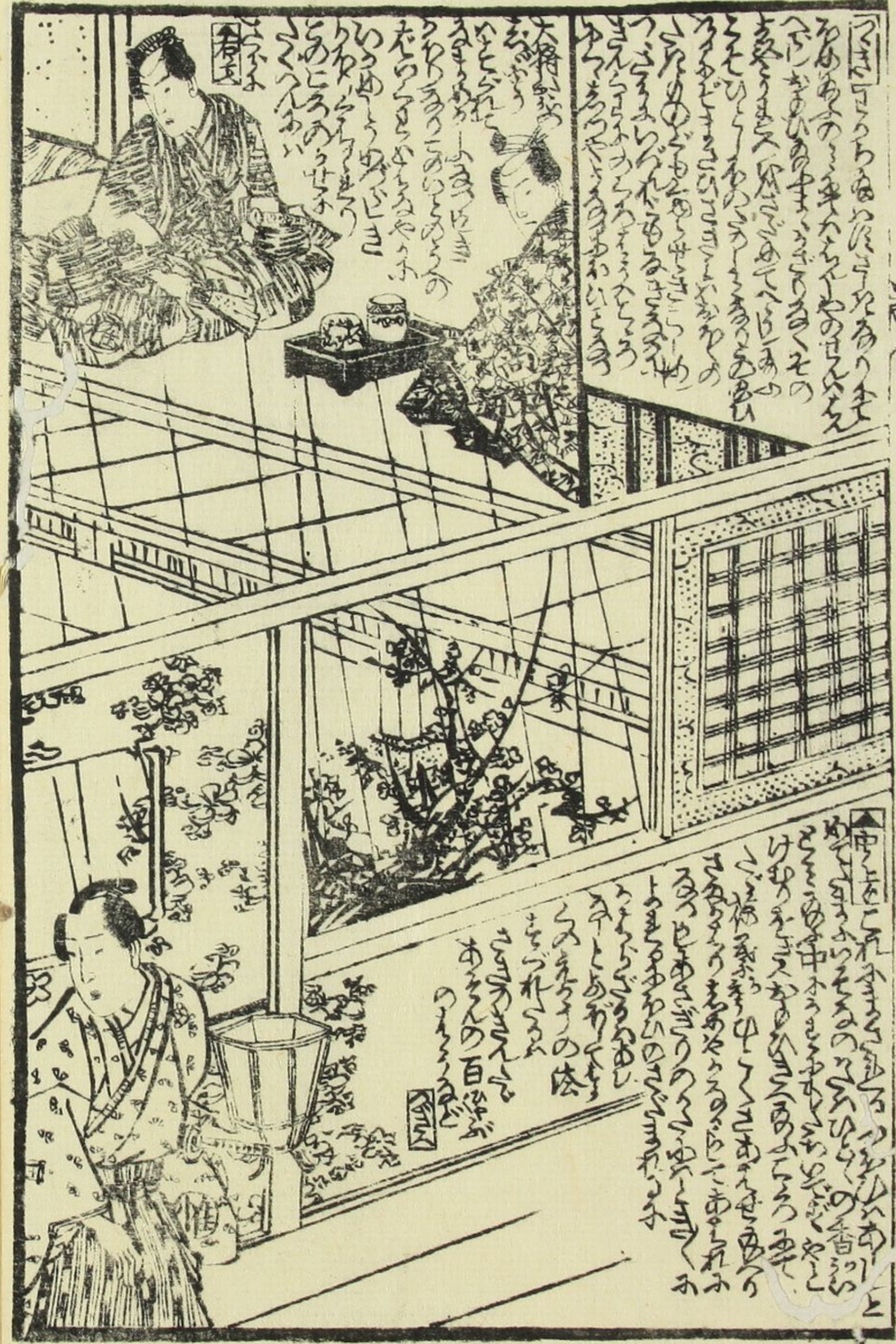
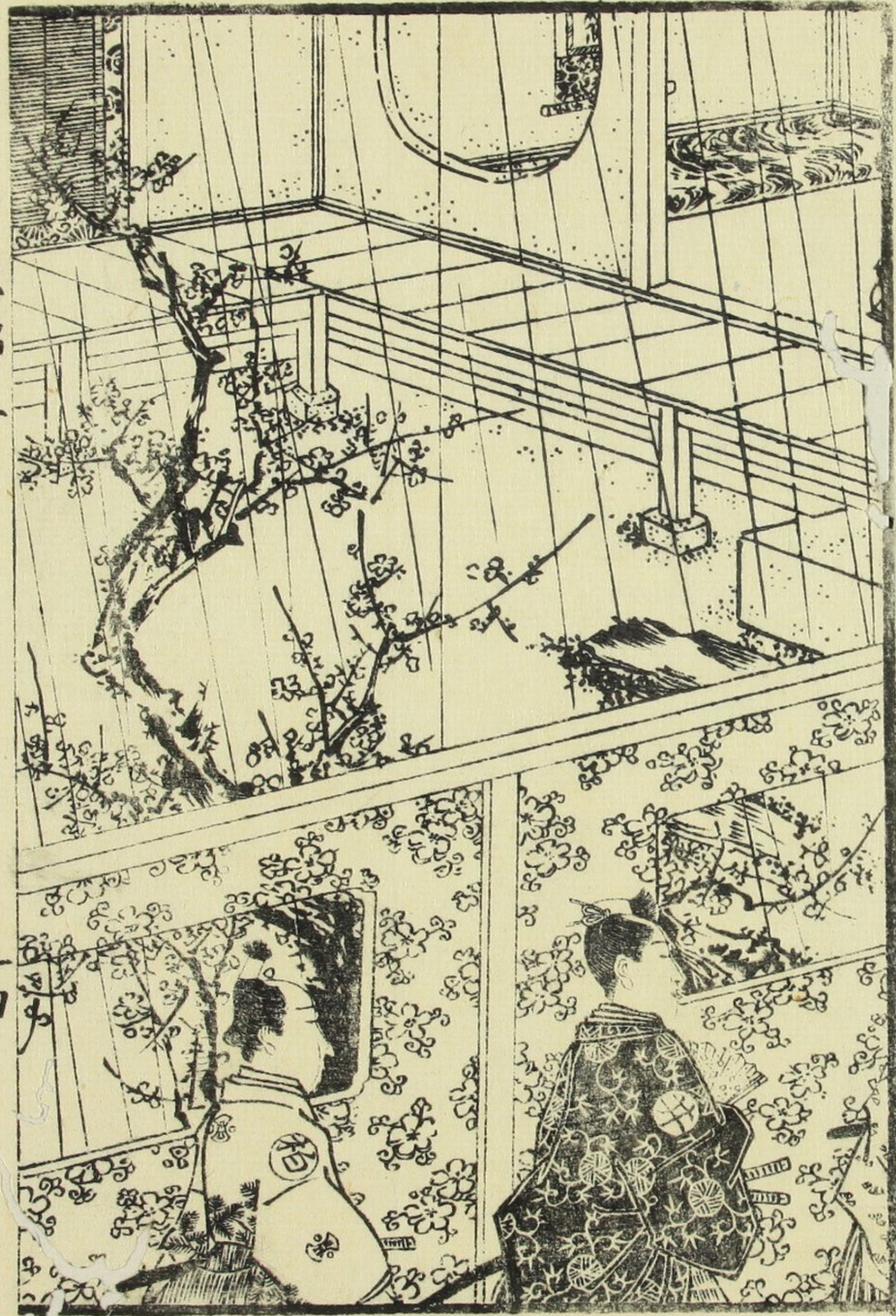


一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、
 二十一、
 二十二、
 二十三、
 二十四、
 二十五、
 二十六、
 二十七、
 二十八、
 二十九、
 三十、
 三十一、
 三十二、
 三十三、
 三十四、
 三十五、
 三十六、
 三十七、
 三十八、
 三十九、
 四十、
 四十一、
 四十二、
 四十三、
 四十四、
 四十五、
 四十六、
 四十七、
 四十八、
 四十九、
 五十、



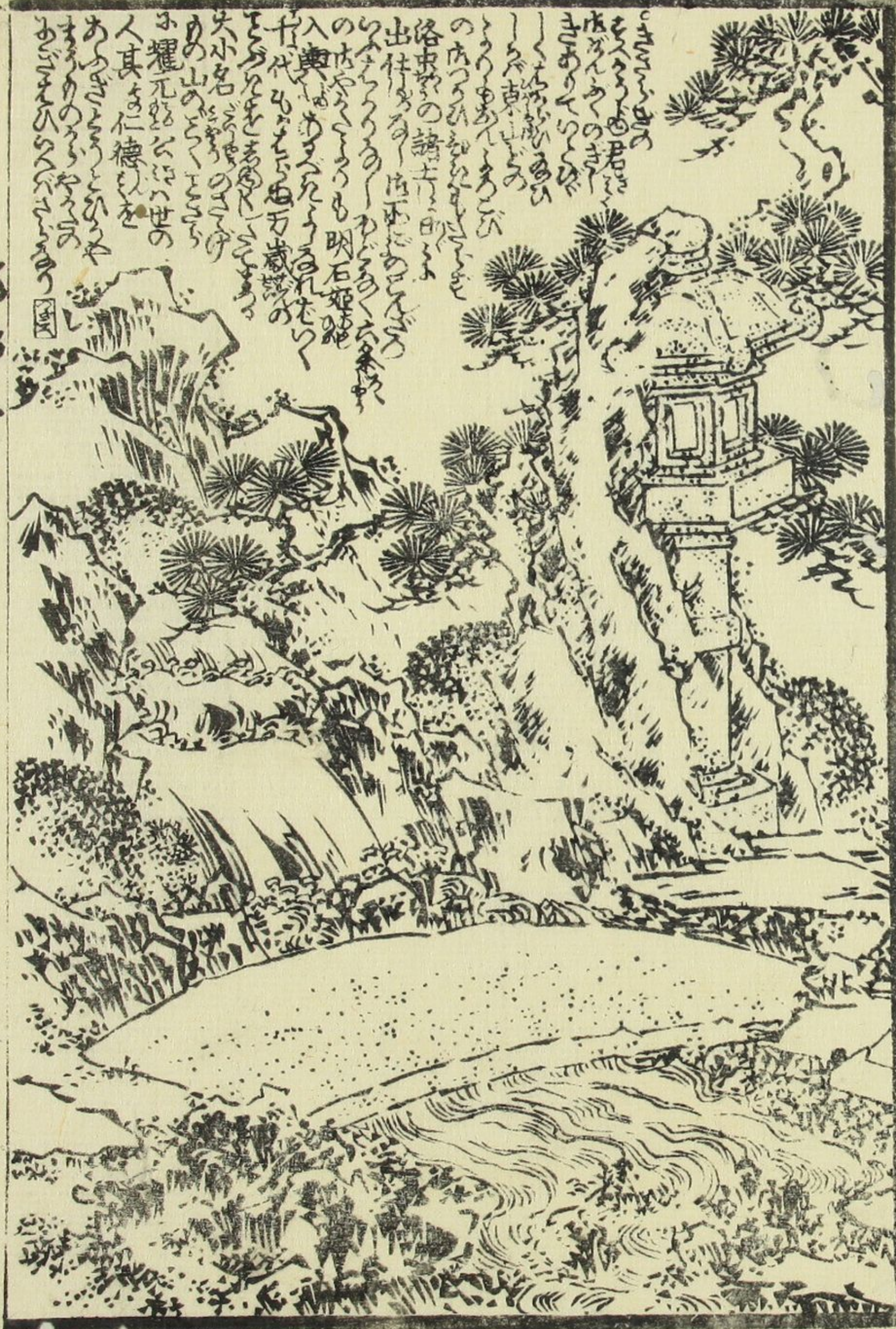
一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、
 二十一、
 二十二、
 二十三、
 二十四、
 二十五、
 二十六、
 二十七、
 二十八、
 二十九、
 三十、
 三十一、
 三十二、
 三十三、
 三十四、
 三十五、
 三十六、
 三十七、
 三十八、
 三十九、
 四十、
 四十一、
 四十二、
 四十三、
 四十四、
 四十五、
 四十六、
 四十七、
 四十八、
 四十九、
 五十、

三十一



圖傳三

十一



此の山は明石姫御
 入興の御所なり
 十代もまた此の
 山に御所を置
 大小名もまた
 の山に御所を置
 小耀元徳公は世の
 人其も仁徳を
 あつたなり
 此の山は明石姫御
 入興の御所なり
 十代もまた此の
 山に御所を置
 大小名もまた
 の山に御所を置
 小耀元徳公は世の
 人其も仁徳を
 あつたなり

那第三



此の山は明石姫御
 入興の御所なり
 十代もまた此の
 山に御所を置
 大小名もまた
 の山に御所を置
 小耀元徳公は世の
 人其も仁徳を
 あつたなり

此の山は明石姫御
 入興の御所なり
 十代もまた此の
 山に御所を置
 大小名もまた
 の山に御所を置
 小耀元徳公は世の
 人其も仁徳を
 あつたなり

那第三

十七



三三



三三



雁の音
氏仲を
病小
即ち

